

編 集 後 記

今年もコロナに追われる一年だった。こんな生活が始まりもう2年になる。夏真っ盛りの頃、その感染拡大は過去最大となった。これまでの日本では想像すらつかない医療崩壊が見え始めた。しかしその後、国民全体の感染対策やワクチン接種の甲斐あって、夏の終わりには幸い収束方向に転じた。

コロナ禍で私たちは新たな生活様式を強いられるようになった。学術集会もそのひとつである。初めは各学会で開催を中止することもあった。しかし、私たちの順応能力は大したもの、現地集会を避けハイブリッドやオンデマンドなどの方式が編み出された。これらWeb開催は遠くまで行かずに済むだけでなく、種々の利点もあることに気づかされた。時間的に聴講できない発表を調整したり、繰り返し視聴もできる。先だって開かれた第50回杏林医学会総会もWeb開催された。残念ながら当初予定の一部講演は中止され、一般演題のみオンデマンド配信されたが、先生方だけでなく学生からも多数の発表があった。

自分の専門学会以外は普段あまり参加する機会もないが、杏林医学会総会は、自分の城の中で様々な分野の一端を楽しむことができる。杏林医学会雑誌も然り、原著論文、総説、症例報告などのほか、毎巻毎号いろいろな特集が組まれている。各分野にて第一線で活躍中の先生方の話を拝読できる。この第52巻4号もそうである。一方で、第10回杏林医学会研究奨励賞を受賞した先生方の喜びの声も掲載されている。昨年度英文誌に掲載された、40歳以下の若手研究者による論文を基に選考され、今回は22名もの応募の中から11名がその栄冠を手にした。

これら学術研究の維持と進歩は重要である。今回の新型コロナウイルス感染症は、かつて人類が遭遇したことのない新興感染症であるにも関わらず、極めて短期間にワクチンが開発され、実際にその恩恵で日本の今の感染収束状況があると考えられる。これまで積み重ねてきた英知が、科学の実用として現れた一例だと感じた。どんな分野でも些細なことであっても、様々な人々が様々な形でリサーチマインドを持ち、研究を続け前へ進めることが重要だと思う。

新たな変異株への懸念とともに、早晩やってくると予想される第6波に備え、第3回目のワクチン接種も始まるうとしている。これまでの経験を基に危機管理を十分徹底し、杏林医学会をはじめとする学術の進歩を維持しつつ、明るい2022年を迎えられることを期待する。

(T.K.)

編 集 委 員

(長) 桶 川 隆 嗣

阿 部 展 次	今 泉 美 佳	井 本 滋
岸 野 智 則	照 屋 浩 司	長 島 文 夫
長 瀬 美 樹	根 本 康 子	森 秀 明
渡 邊 衡 一 郎		

杏林医学会雑誌 第52巻 第4号

URL : <http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/user/kyorinms>

令和3年12月28日発行

編集人 桶 川 隆 嗣

発行所 杏 林 医 学 会

東京都三鷹市新川6-20-2

杏林大学 医学図書館内